百獣の王

羽毛蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
百獣の王

【Ｎコード】
Ｎ３８７５ＢＡ

【作者名】
羽毛蛇

【あらすじ】
世界中の生き物を見て回りたい。そんな夢を持った日本人が「ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ」の世界に転生し、主人公一行と「自分だけの生物図鑑」を作る為に旅に出ます。
主人公は理論派修行ヲタで結構な強キャラなんですが戦闘描写より心理描写を描きたいので、その強さはあまり報われませんしチートと呼べるほどではありません。主人公はロビン登場に期待です。
作者の初投稿作品になりますので、ツッコミどころが多々あるかも

しれませんがよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

はじめまして。作者の「羽毛蛇」です。

投稿は始めてですが、よろしくお願いします。

プロローグ

「コケコッコ～！！」

「・・・・ん？」

目覚めるとそこは見知らぬ砂浜でした。

・・・・・・・・・・・・・・はいいいっ？

いやいやいや、ここ何処？マジで？

いや、落ち着け、まずは現状確認だ。俺は「藍沢（あいざわ）匠（たくみ）」中洲のＮｏ．１ホストだ。酒に飲まれるなんて俺らしくもねぇ。

・・・あれ？・・・・・・本名が思い出せん。

やべぇな。相当酔っ払ってるみたいだけど、別に二日酔いって訳でもなさそうだ。一時的な記憶障害か？世界中の生き物を見て廻る為の資金集めでホストなんかやってんだから、記憶障害になるまで飲むなんて馬鹿らしい。まあ、酒は好きだけど。

てかここは本当に何処なんだ？百地浜？・・・百地にこんな森はないな。ていうか俺は泳げないから海には近づかん。

まぁ、じっとしていてもしょうがないし、どっか見覚えのある場所まで歩くか。流石に酔っ払って福岡から脱出してることは無いだろ

うし。

「コケコッコ〜！！」

さて、歩き始めて1時間。

海です。ただひたすらに海です。

なんで？海岸沿いに1時間も歩き回って左手に海、右手に森。こんな場所はしらん。ていうか森っていうよりジャングル（？）に見えてきた。なんかジャングル（笑）から鶏の声聴こえてるのも意味不明だし、ちょっと見にいってみるか。鶏かわいいしね。

・・・・・・・・・・・・・・・

結論から言おう。こんな鶏はいねぇ！！

鶏冠があるし尾は鶏なんだが、体は何故か狸っぽかった。

ＵＭＡを発見したので取り敢えず捕獲。携帯で写メろうとしたんだけど、なんか携帯もなかった。この時点で俺は現状を夢だと断定した。何があっても商売道具の携帯を手放す訳が無い。

だから兎みたいな蛇がいても、ライオンみたいな豚がいてもしょうがない。スルーライフを決めこんだ。

・・・でも、この変な生き物を何処かで見たことがある気がする。大好きな漫画で。某ハンター漫画だったか？

そんな事を考えながらポケットからタバコを探していると、

「それ以上踏み込むな！！」

何処からか、ていうか箱からモジャンボが生えてる（笑）辺りから声がした。

あぁ「ガイモン」だ。という事はこの夢は「ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ」か。「ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ」は２番目に好きな漫画だし暫く夢を観てるのもイイかな？

「くらぁ！！無視すんな！！さっきからボケっとしやがって！早くそいつを放せ！！」

「そいつ？」

「お前が抱えてる鶏だよ！！！放さなければ貴様は森の裁きを受けその身を滅ぼす事になるのか？」

やっぱ疑問系なんだ（笑）そんな事いわれても夢の中でしか触れな

い不思議生物なんだから、そう簡単には手放せない。それにこいつはどちらかというと鶏っぽい狸だ。あれ？そういえば夢の中なのになんでモフモフ感を感じられるんだ？

「だから無視すんなって！！！もういい！森の裁きを受けろォ！！！」

ズドォン！！

「・・・ってぇ？」

なんだこの痛み？チリチリと焼ける様な痛みがする頬を撫でると、手には真紅の血。

その生温い鮮血と徐々に麻痺していく頬の痛みは余りにもリアルで俺は本当に「ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ」の世界に来て仕舞ったんだと唐突に理解した。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？ってまだ原作と絡んでませんけどね（笑）

小説って難しいですね。ご指摘・ご感想がございましたら、遠慮無くお願いします。

どんなにけなされようが最後まで投稿します。作者はしつこいし暇なので。

珍獣島（仮）でマシオカで叫ぶ（前書き）

地の分が多いですが主人公の過去なので多めに見てください。

珍獣島（仮）でマシオカで叫ぶ

「やったーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

「うぉっ！お・・・お前なんだ！！！いきなりどうした？Ｍか？Ｍなのか？」

俺は間違いなく「ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ」の世界にやってきた。それを理解した１番素直な気持ちだった。

だって「ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ」だぞ！？珍獣だらけじゃん！碌な遊び道具も与えられず英才教育だかなんだか知らんが物心ついた時から勉強ばかりさせられていた俺にとって百科事典に載っていた動物たちの挿絵を見るのは唯一の楽しみだった。

いつか自分の目でこいつらを見てみたい。夢の中での俺は世界中の動物たちと友達だった。幼稚園のお受験には初歩的な動物たちの知識も必要だったからだろうか、両親は百科事典じゃない動物だけの図鑑も頼めば買ってくれた。勉強は好きだったからそんな感じで俺はいい子ちゃんに育った。

小学校５年生の時、宿泊学習に友達が漫画を持ってきた。某ハンターが主人公のその漫画は俺の心を揺さぶった。衝撃だったんだ。欲しいものを自由に追い求めるその職業が。俺は将来ハンターになる。そんな子供らしい夢を持った。

家に帰って両親にその話をすると・・・キレた。それも烈火のごとく。

そして俺は愚れた。こちらも烈火のごとく。「健全な精神は、強靭な（？）肉体に宿る」とか言って俺に空手と柔道、ついでにサバットまで習わせていたくせにメタボだった親父は小学５年生にそりゃもうあっさりと負けた。

表面上は和解したが親父の関心が２つ下の弟に移ったのをいいことに俺は本格的にハンターになる準備を始めた。あの一件以来俺の頼みを大概聞いてくれる親父に頼んでネット環境を整え、知識を吸収した。中学３年になる頃にはさすがにハンターになろうとは思ってはいなかったが、それでも世界の生き物を見て回ることは夢見ていた。

高校を卒業すると同時に家から放り出され、自分で生きていくことになった。マンションの１か月分の家賃しか払われてなかったのであわてて仕事を探していたらホストクラブの店長に声をかけられ月締め即給というその店のシステムに引かれて入店した。

まあ結果を言えば天職だった。入店一ヶ月でＮｏ．１になりそれから６年その地位を守り続けて稼ぎまくった。少々贅沢をしても遊んで暮らせるお金はとっくにあったのだが、俺は世界を旅するつもりなのでまだまだ稼ぐつもりだった。

いきなりこの世界に飛ばされてお金は無駄になったが、この世界には元の世界じゃ考えられないような珍獣がわんさかいる。楽しみでしょうがない。

「聞けぇーーー！！頼むから話を聞いてくれ（泣）」

どうやら俺が長い回想に浸っている間、ガイモンさんはずっと俺に話しかけ、もとい叫んでいたらしい。悪いことをしてしまった。

「いやぁ、すみません。この島にこれたのがうれしくて」

「なに！？お前はそんな小さななりで海賊か？いや、鶏を放さねぇ所を見ると密猟者か！？」

だからこいつは狸だってのに、いや1回もツッこんでなかったか。それはいいとして小さななり？俺は２４歳、身長は１８６ｃｍだぞ？小さくはないだろ？まあこの世界では身長３Ｍとかの人間がいるからでかくはないだろうが、そういえば俺の声がずいぶん高く感じるし目線が低い。

？？？？・・・いやな予感しかしねぇ。

「おじさん鏡もってる？この子放してあげるから貸して？」

「鏡？ほれ。ちゃんとそいつ放せよ！」

ガイモンさんが鏡を放ってよこす。要求しといてなんだがガイモンさんが普通に鏡を持ち歩いてることに驚いたがこの際それはスルーだ。えらくかわいらしいデザインにも驚いた（若干引いた）がそれもスルーだ。俺のスルースキルは割りと高い。

恐る恐る鏡を覗き込み愕然とする。

「誰だお前！？」

不意に思い出す。俺はバースデイイベントであまりに飲みすぎて急アルで倒れたんだ。意識はあった。呼吸が止まっていくのもなんとなくわかった。

「あぁ、俺、死んだんだ」

どうやら俺は異世界漂流者ではなく、異世界転生者だったようだ。

ガイモンさんといっしょ（前書き）

ガイモンさんとの生活です。

ガイモンさんといっしょ

というわけで俺は転生者だったようです。ちなみに転生してから浜で起き上がるまでの記憶はありません。でも一緒に打ち上げられていたっぽいかばんの中にはかなり上質な紙（この世界では貴重なものらしい）で出来た分厚い動物図鑑、サバイバルナイフ、釣竿、キャンプ用品、手帳に筆記用具。さらには見た目7歳程度なのにかなり鍛えられた身体。おそらくこの世界で幼き頃の夢、ハンターを目指していたんだろう。さすが俺！ブレが無い！！

ガイモンさんによるとこの近海を昨夜大嵐が襲ったらしいので、それでこの島に流れ着いたのだろう。まあ俺のことだから最初からこの島を目指していた可能性もあるが。

あ、俺の容姿を説明するとデビルメイクライのダンテだね。小さいけど。銀髪です。目まで灰色でした。何故でしょう??まあイケメンなので許す！！元の世界でも顔はそこそこよかったのであまり感動は無いがダンテは好きなキャラクターなのでそこはかとなく嬉しい。

必要最低限の事しかガイモンさんと話さず考え込んだりしている俺を最初は不審がっていたが狸（ここは譲れない）を開放したことと、動物談義をしたことによって今は仲良くなった。もはや親友だ！ガイモンさん今まで珍獣島を守ってくれてありがとう・・・（泣）この島にいる間は手伝うよ！！

~Ｓｉｄｅ　ガイモン～

可笑しなやつだ。

最初は海賊か密猟者かと思った。大海賊時代は子供に残酷だ。俺のいた一味みたいに気のいいヤツ等ばかりじゃねェ！！海賊に親を殺された孤児なんて五万といる。そんなヤツ等が海賊になることなんて別に珍しい事でもねぇ。だが、どうやらこいつは違うようだこいつの鞄の中身を見たときはやっぱり密猟者じゃねえかと思ったが、味の記録の為に一匹仕留める以外、必要以上には狩らないらしい。

どうやら生き物のすべてに興味があるらしく、姿や生態、食用時の味まで記録した動物図鑑を作るのが子供の頃からの夢だそうだ。今でも十分に子供だと思うのだがそのことを聞くとはぐらかされた。

アイザワ・タクミという名前とハンター（駆け出しらしい）という職業だった事以外はほとんど覚えてないらしい。暫くこの島の調査をしたいと言い出したのでこいつの眼を見据えると真っ直ぐないい眼をしてやがった。２つ返事で了承してやると、

「俺たちは親友だ！！！」

なんて、こっぱずかしいことを言いながら抱きついてきやがった。

可笑しなヤツだ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

ガイモンとこの島で暮らし始めて２ヶ月が経った。島の動物たちの調査はあらかた終わり、今は釣りでその日の食料を確保しながら魚類の調査と、この世界の植物の知識をガイモンに学んでいる。まあガイモンにわかるのは喰えるか喰えないかぐらいのもんだが・・・

二人で生活するうちにガイモンは俺の料理の腕を気に入ってくれたようだ。俺は料理にはちょっと自信がある。世界を旅するためにはとサバイバル技術を元の世界で学んでいた頃、まずい飯は食いたくないと思ってサバイバル料理術を独自に学んだ。

仕事が休みの日は山奥の自然地にキャンプに行ったりして訓練をしていたので、レストランの厨房に慣れているサンジには負けないつもりだ。まあ作れるのは所謂Ｔｈｅ男飯だけなのだが・・・

ちなみに空の宝箱は確認済み。ガイモンはちょっと悲しそうだったけど原作ほど号泣はしていなかった。まあその理由はガイモンがこの島にいる期間がまだ３年だという事が大きいだろう。俺は暫くしたらこの島を出るつもりなのでガイモンも一緒に来ないかと誘ったのだが、

「森の番人を続けてェんだ」

と、原作どうりのことを言っていた。３年で自分の生涯をかけて守っていくほどの情を抱くなんてやっぱりガイモンはいいヤツだ。

悪魔の実（前書き）

主人公には能力者になってもらいます。

悪魔の実

そんなこんなで日々を過ごしながらそろそろイカダでも作ろうかななんて考えていたある日、

「お～～ぃ・・・タクミ～！珍しい果物を見つけたんだ！食ってみねェか？」

と果物を持ってきた。ガイモンにしては珍しくきちんとカットされている。

「皮剥く前に持ってきてよ。どんな果物かわかんないじゃん」

「あっ！すまねェな～お前ェに植物の事教えるなんていいっときながら。ま、どっちにしろこいつは俺も始めてみる果物だから！喰えるかどうかはわからねェ！！」

「そういう問題じゃないんだけどなぁ・・・」

そう言いながらも、せっかくガイモンが採って来てくれたんだし、いざとなったら食中りに利く薬草もあるし（タクミが発見した）。ということで取り敢えず喰ってみた。

「（まっずっっっ）っっ！！！！」

何というか強烈な味がした。だが吐き出すのも見っともないので何とか飲み込んだ。

「ガイモン！！！なんだよこれ！！！滅茶苦茶まずいぞ！！！」

「はっはっはっは！！！まぁ見るからに不味そうだった！！！お前がどんな顔して喰うか見てやりたくてなァ！っはっはっはっは・・・・・・！！！！」

ガイモンはまだ笑っている。ちょっとムカつく！一発殴ってやろうか？いやサバット仕込の蹴りを・・・・・いや・・・・・殺してやろう・・・・・・・・・？・・・・！？

なんで！？俺はこんな事ぐらい一発軽めに殴って赦してやる筈だ。こんないたずらファミレスで究極にまずいドリンクを作成して飲ませる遊びと変わらない。なのに俺はこんな事で一瞬だが本気でガイ

モンを殺そうと決意した。明確な殺意だ・・・

ふと我に返ってガイモンを見てみるとなにやら脅えている。

「ガイモン??どした〜??」

努めて明るく聞いてみるが、尚も脅えた様子で、

「タクミ??・・・・さっきのありゃ何だ????」

「さっきのアレ??」

『わけがわからないよ』・・・ふざけてる場合じゃなかった。ガイモンの脅えっぷりは少々異常だ。まさか俺が覇王色の覇気を使えるわけでもないし・・・使えるのか?

試してみようと思い、やり方が解らないので先ほどと同じようにガイモンに殺気を強く向けてみる。気絶したら後で謝ろう。

ガイモンは気絶こそしないが今にも叫び声を上げそうだ。覇王色が使えてるのか?と疑問に思っていると俺の目線が段々と上がっていき、それに合わせて体中に力が漲ってきた。腕を見ると太く毛深くなっており、立派な爪が生えている。

ガイモン愛用のかわいい鏡をガイモンのアフロの中からひったくる。
脅えるガイモンをスルーして鏡を覗き込み、・・・・・一度吼えてみた。

「ガァアオォゥ！！！」

そこには一風変わった百獣の王、銀髪の獅子がいた。

悪魔の実（後書き）

タイトルの由来です。

銀髪の獅子（前書き）

主人公の今後の方針が決まります。

銀髪の獅子

”動物系（ゾオン）”ネコネコの実　モデル　”獅子（ライオン）”

どうやらこれが俺の喰った悪魔の実の名前のようだ。獣形態の姿からして間違い無いだろう。

俺はライオンが好きだ！むかしどっかのテレビ番組で陸上最強の生物はホッキョクグマだの何だの言っていたがそんなモン知らん！最強の陸上生物はライオン！！俺は信じている！！！

だから喰った悪魔の実がこの実だったことはすごく嬉しいし、人獣形態の自分を見たときはかなり興奮した！でも、悪魔の実を食べてしまった事自体が問題だ。

これじゃあイカダでこの島から脱出するのはメチャクチャ危険だし、なにより海中生物の調査が釣りに限定されてしまう。

俺が酷く落ち込んでいるのを見てさっきまで脅えていたガイモンが謝りつつ慰めてくれた。こんな姿（人獣形態から戻り忘れていた）の俺を怖がらないようにしてくれるなんて・・・ちょっぴり箱が震えているけど、やっぱりガイモンはいいヤツだ。

肉食系の凶暴性を抑えて人形態に戻る。この制御はかなり気を使う。自在に操っていたルッチ、ジャブラやチャカは凄いな。俺も練習し

よう。

島の脱出はおそらく出来る。俺には航海術も無いがこの身体があればおそらく「六式」が壱つ「月歩」を極めれば何とかなりそうだ。この世界は空気にプロテイン入ってんの？ってくらい鍛えればみんな強くなる。純粋に肉体が強化される動物系の悪魔の実を喰ったことだしいつか出来るようになるはず。

問題は海洋生物調査・・・・・・・・・・あれ？簡単じゃね？麦わらの一味にはいればいいんだ！！！ルフィはなんたって主人公だきっと俺がいたって海賊王になる！！ゾロは海王類とか仕留められそうだし、ナミにはシキが眼をつけるほどの航海術がある。ウソップにはスゲー釣竿作ってもらえそうだし、サンジの夢は「オールブルー」半分俺の夢とかぶってるようなもんだ。チョッパーにはランブルボールでの悪魔の実の可能性拡大を手伝って貰えるし、何よりチョッパーが珍獣。フランキーには「シャークサブマージ」を強化版として作っていただきたい。ブルックは・・・・海賊は歌うんだぜ！！

そしてなによりロビン！！ニコ・ロビン！！！好みなんです！タイプなんです！！好きなんです！！！大事な事なので三段活用しました。後悔も反省もしない。早く3次元のロビンに会いたい！たぶん凄いよ！！そりゃ凄いよ！！！何処がとは言わない。俺の6年間にかけて必ず堕とす！！・・・暴走はこれくらいにしておこう。

まあロビンと愉快な仲間たち（麦わらの一味）に入る事が出来れば俺の夢は安泰だろう。しかし、あの一味についていくには半端な覚悟ではだめだ！！よしっ幸い原作が開始してルフィがここにやってくるのは約17年後、今から鍛えてあいつらを待とう。俺は下準備は入念にするタイプなんだ。「六式」会得を最低目標にできれば「

覇気」も身につけたい。

「よーしっ！！待ってろ珍獣ども！！」

～Ｓｉｄｅ　ガイモン～

とんでもない事になっちまった。地面に埋まった箱に入ってたのに全く傷んでねェ果物なんていくらなんでも怪しすぎるだろ！！まさか悪魔の実だったとは・・・アレ確か売ったら凄ェ金額になったんだよな・・・そういう問題じゃねェだろ！！

俺は最低だこんなに落ち込んでるタクミに謝るか慰めてやるしかできねェ。でもやっぱりこの姿はちょっと恐ェなと思っていたらタクミはちょっとだけこっちを見てから苦しそうな顔をして元の姿に戻った。どこまで優しいんだこいつは！！

俺は傍にいてやることも出来なくなって少し離れたところでタクミの様子を見守った。暫くすると表情をいろいろ変えながらタクミはうろうろしだしたきっと悪魔の力を押さえつけるのに必死なんだ。俺のために・・・タクミが何かを叫んだ声ではっと我に返るとタクミは足をもつれさせて何度も転んでいた。

きっと身体をまともに動かすのも辛いのだろう。俺は誓った・・・タクミがこの島を出れるときが来るまで、俺は何があってもタクミの傍にいる！俺はお前の事も守るんだ！！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「「剃」って・・・・やっぱいきなりは無理か、地面を何度も蹴って急加速ブルーノが言った通りにやったつもりなのに、「剃」ってぇ・・・・・・」

ガイモンがこっちを見てる。あんまりかっこ悪いところ見られたくないし、もうチョイ練習して出来なかったら基礎体力からつけ直そ！！

銀髪の獅子（後書き）

ガイモンはいいヤツだ。

あれから１８年（前書き）

修行時代はとばします。主人公とガイモンさんじゃ無理です。絶対に面白くない。

投稿を始めたばかりなのにお気に入り登録が４件もあってとても嬉しかったです。もらった評価はやはり厳しかったんですが・・・

びしびし指導しちゃって下さい。

あれから１８年

「みなさんお久しぶりです。藍沢　匠です」

・・・はぁ俺は誰に向かって喋ってんだろ？麦わらの一味に加入すると勝手に決めてから１８年経ちました。おかしくね？俺はガイモンさんにしか関わってないはずなんだから原作が崩れる事は無いはず。ということは原作でのガイモンさんの２０年発言は約２０年という事だったらしく俺は去年１年間無駄に心を躍らせ続けた。こんなことなら修行を全力で続ければよかった。

修行の結果を上げると俺の「六式」はほぼ完成した。身体作りに１０年かけたかいも有り「剃」「月歩」「嵐脚」「指銃」は問題無い。けど「紙絵」「鉄塊」に関しては性能のテストに限界があった。

まず「紙絵」。これはこの島で俺を除いての最速はガイモンさんのピストル。これが問題だった。この世界にはピストルよりも早い攻撃をする人間がいくらでもいる。ピストルの弾を避けられる人間もいくらでもいる。正直メチャクチャな世界だと思うが俺もこの世界で生きていく以上「紙絵」は覚えたい。俺は痛いのは嫌だ！

次に「鉄塊」。これも最初はガイモンさんのピストルで特訓しようとしたのだが「紙絵」の後に特訓を開始したのがまずかった。ビビリな俺は反射的に「紙絵」でかわした。・・・なんかごめんなさい。でも理論はなんとなく解ってる。身体を鉄の高度に高める。正直これは筋肉どうこうもあるが「生命帰還」の技術も入ってると思う。だって斬撃で皮膚が切れないんだから、皮膚も操るんでしょ？皮膚

を操る感覚っていうか、操れてるのかよく解らんから髪をまずは操ってみた。・・・5年かかった（泣）「鉄塊」ってこんな複雑か？たぶん修行法を間違えたんだろう。それかセンスの問題？とにかく人獣形態の「鬣鉄塊（たてがみ）」でピストルを防げることを確認した後、身体の各部でピストルを受けきることにも成功した。ちなみに全身に「鉄塊」かけて動くのは無理だった。ジャブラは本当に凄い！！まあこれも想定外の威力は当然あるから徐々に実験していきたい。

まあ「六式」の前4つは失敗してもこちらにたいした損害が出ないので完成としているだけで、まだまだ上を目指すつもりだ。ちなみに一番とくいなのは「嵐脚」！！いづれ披露したいねぇ！！

あ！「覇気」は普通に無理！！理論も何も訊いてないし。どんな修行をしていいかすら解らなかった。

「月歩」で海を渉ろうのコーナーも実施されておりません。ライオンらしく持久力は皆無なようで跳んでいられる時間は精々10分ほどだね！応用技の「剃刀」ともなると1分持たないしね・・・そんなこんなで最近は「生命帰還」と「剃刀」の修行に集中。

スリムな人獣形態を維持しながら「剃刀」で島の外周を高速パトロール。万が一、主人公一行が通り過ぎようとしたら無理やりにでも船に乗り込む！！見た目はすっかりダンテ！髪は「生命帰還」に使いやすいように伸ばしてます。某ハンター漫画の「円」みたいなことができますよ。近距離に死角はありません。

そういえばガイモンさんはここ数年畑を始めて隠居生活。森の番人に俺が加わるようになって海賊も密猟者も激減したね。そのせいで銃の調達にちょっと苦労したりもした。最近は料理も出来るように

なって晩飯はガイモンさん担当。１６ぐらいから食後にガイモンさん特性の濁酒みたいなので晩酌している。

そんな今日この頃。

パトロール兼修行を中断し、浜辺で休憩をしていたら、

「なおったーーーーっ！！！」

沖合いから微かに声が聞こえた！

来た！！ナミに警戒されたら困るので双眼鏡を持つ前に森の入り口付近に身を潜めて様子を伺う。

二隻の船は真っ直ぐにこちらに向かってくる！

俺の胸は高鳴る！！ついに会えるんだ、俺の仲間！！未来の海賊王に！！！

あれから18年（後書き）

ここまで難産だった・・・次回からは一味との絡みが始まるので会話もやや増えるでしょう。

麦わらの一味”ハンター”アイザワ・タクミ（前書き）

一味に合流します。

麦わらの一味”ハンター”アイザワ・タクミ

～Ｓｉｄｅ　ルフィ～

「孤島に着いたぞ！！・・・・・・・・・何もねェ島だなァ！！
森だけか？」

「だから言ったのに無人島だって。仲間探すのにこんなとこ来てどうすんのよ」

島の感想を言ったらナミのヤツ軽く呆れてらァ。でもなんとなくいると思うんだけどなァ新しい仲間！！それもとびっきり頼りになるヤツが！！！

そしたら森の向こうから銀色の鬣をたなびかせて、でっけェライオンが歩いてきた！！本能で解る！あいつはバギーんとこのライオンとは違ェ！！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

出来る限り威厳を見せながら、俺は獣形態でルフィたちの前に姿を現す。それと同時にルフィの鋭い視線がこちらへと向けられる・・・あれ??ルフィなら面白がって「あのライオンを仲間にする!!」とか言うのかと思ったんだけどなんか警戒されてる??

「ルフィ!!ライオンよ!!なんでこんな所に居るのかしら??珍しい色だし捕まえたら高く売れるんじゃない?」

ナミ・・・そりゃないだろ（泣）ここまで金の亡者だったとは、いや冗談だと信じたい。そんな事を考えているとルフィが静かに口を開いた。

「お前・・・強えェな。なんとなく解る。」

・・・???なに??このルフィのテンション?予定と違うんだけど?このままじゃ仲間を守る為に決闘だとか言い出しかねないし、人形態に戻って話をしよう。

「君も強そうだね。この獅子の姿を前にして逃げるでもなく、構えるでもなくただ認めるヤツなんて初めてだ」

「・・・・っ!!?」

突然人の姿になった俺にナミは息を呑む。

「驚かせてしまってすまないね。俺はアイザワ・タクミ、ネコネコの実を食べたライオン人間だ。今はこの森の番人をやらせてもらってるよ」

「ネコネコの実のライオン人間ってアンタも悪魔の実の能力者な訳！？」

「そうだね、動物系悪魔の実を食べた人間はその動物の力を取り込む事ができるんだ」

「あいかわらずメチャクチャだわ！悪魔の実って！まあいいわ所で森の番人って？」

ナミは俺の存在をそういうもんだと割り切ったようだ。適応能力高いな！

「あぁ、この森にはたくさんの珍獣が生息していてね、珍獣狙いの密猟者が後を絶たないんだ。だから俺があの姿で追い払ってるって訳さ」

「なるほどね」

「・・・そいつらが逃げねェ時はどうすんだ？」

ナミの疑問が解消されると先ほどまで黙っていたルフィが聞いてきた。

「もちろん力尽くでお帰りいただいてるよ？」

「ははっ！そっか。やっぱお前ェ強ぇんだな！」

今度は間を置かずにルフィは答えた。

「それなりに鍛えてはいるよ。俺には夢があるからね」

「夢？？」

「あぁ生まれる前から決めていた夢さ！！この世界には俺の知らない生き物がこの島の珍獣の何千倍っているんだ！！いつか信頼できる仲間と共に、俺は世界を巡って自分だけの生物図鑑を作る！！」

「・・・お前の夢、俺の船で叶えねえか？」

「！？・・・お前の事を俺は何にも知らないぞ？そんなおま「俺はモンキー・D・ルフィ！！海賊王になる男だ！！！いいから俺の仲間になれ！！！」っ！？」

「・・・・そうかい・・・・よろしく！船長（キャプテン）！！！”ハンター”アイザワ・タクミ！これより一味のご厄介になる」

Ｄｅｐａｒｔｕｒｅ（前書き）

ＨＹ好きなんです。

お気に入りが１１件に、本当にうれしいです。今日はいけるとこまでいきます。

Departure

ニヤリッ・・・計画どうり！！！

いやあ焦った！！うまい事仲間になれたよ。やっぱね、ルフィは守るための強さ！夢のための強さ！この二つを認めると思ったんだよね！警戒された時は本当にどうしようかと思ったけど、まあ何とかうまくいったね。

今はお世話になった人に挨拶に行くと言う俺にルフィとナミがついてきてガイモンと四人で馬鹿話をしている。俺がこの島にとどまるわけになった。ガイモンの悪戯の話をしていると

「タクミは珍獣のおっさんも守ってたんだな！！」

「ブッころすぞ！！」

というやり取りもあった。でもその後に別れの挨拶をする時はルフィは笑ってた。ナミも笑ってた。

俺とガイモンは・・・やっぱり笑ってた。漫画で読んでたときにはガイモンのことなんか表紙連載で樽娘と一緒に出てくるまですっかり忘れてた。でも今はガイモンのことを本当の親父だと思ってる。

名前も覚えてない元の世界の親父、名前どころか顔も覚えてないこの世界の親父、生きてんのかなぁ？何となく二人とも生きてる気が

する。でも、俺の親父はガイモン。これまでも、これらも。
だから、さよならは言わない弁当もって浜辺に出かけるときみたいに振り向かないで、でもいつもより心を込めて、

「ガイモン〝・・・いっできます」

「あぁ・・・・・いっでこい〟タクミ」

・・・・またね・・・・・親父。

〜Ｓｉｄｅ　ガイモン〜

いつもなら昼の休憩が終わってまた訓練でも始めてる時間なのにタクミが畑にやってきた。後ろからついてくる二人を見てとうとうこの時が来たのだという事を悟った。

タクミが世話になった人に挨拶をしたいなんて殊勝な事を言ってきやがったかと思えば人のことを珍獣呼ばわりしやがって、ふざけた船長の船をタクミはえらんだもんだ。おまけにタクミまで腹抱えて笑ってやがる。ライオンとのあいの子みてェなタクミのほうがよっぽど珍獣だ。まぁ、あれは俺のせいか、それなのにタクミは俺を攻めなかったそれどころか俺と今まで一緒に居てくれた。

侵入者対策の罠の位置を注意したり、薬草の煎じ方なんかを紙に書いていたものを渡してくれたりと最後まで俺の世話を焼こうとしていたが伝える事がなくなったのか笑顔のまま歩き出す。

だから俺も笑顔を返す。タクミは毎朝浜辺に出かけるときみたいに自然に振り向きもしないで俺に手を振る。

「ガイモン゛・・・・いってきます」

「あぁ・・・・・いってこい゛、タクミ」

・・・・泣いてんじゃねぇ・・・・馬鹿息子。

§ Side Out §

Departure（後書き）

主人公はガイモンの元でいい子ちゃんに育てなおされました。ガイモンから離れ偶には腹黒くなるかもしれません。

ナミとゾロと俺と（前書き）

珍獣島でずっと寝ていた漢との初対面です。

ナミとゾロと俺と

ガイモンと森の中で別れ、俺は食料が無いと言うルフィの為に果物を山ほど積んでやった。・・・ナミの船に。単純な話だ、ルフィの船に積んだら沈む。

「果物だけか～？肉ねェのか～に～～く～～」

困ったヤツだ俺がこの島の動物たちを守ってきたってこと忘れてんじゃないのか？？

「魚でよければ後で売れるほど釣ってやる。この島で肉が喰いたいなら俺を倒せ！！」

「・・・！？おっ俺が言いたかったのは魚肉だ魚肉！！お前と珍獣のおっさんが守ってきた島だって忘れてたわけじゃねェぞ！！・・・ほっ本当だぞ！！！」

「嘘へたっ！！」

果物を積み終わってルフィの船に向かおうとすると

「ちょっと待って。あんたはこっち！」

ナミに呼び止められた。

「どうしたんだ？俺が居ないと寂しいのかい？」

「・・・アンタそんなキャラだったっけ？まあいいわ、そっちの船にアンタみたいなライオンが乗ってたら船は沈むわよ。あたしの船のほうがいくらかましだから、あんたはこっちに乗りなさい！」

「わかったよ」

俺はナミの船の出港を手伝う。ルフィの小船のほうではゾロがまだ寝てる。カバジとの戦闘で負ったはずの傷は大丈夫なんだろうか？少しだけ心配しながら俺たちの2隻は珍獣島を後にする。

出航して暫くして俺は航海が安定しているのを確認して、

「ところでお嬢さんのお名前は？まだ聞かせてもらってなかったと思うんだけど？」

「あら、そうねなんかいつの間にか溶け込んでたから。わたしはナミ今はそうね、雇われ航海士って所かしら？よろしくねライオンのタクミ」

「ライオンのって・・・・まあいいやナミは一味の仲間じゃないのか？」

「手を組んでるだけよ！わたしは海賊が嫌いなのよ！」

「あんなに楽しそうに笑ってて説得力無いな」

「・・・っ！？うるさいわねェ！！」

ナミは若干照れてるようだ（笑）あんまりからかうのはよくないのでご機嫌をとろうとしていると

「くあぁ・・・よく寝た。　てめェは誰だ？」

「ようやく起きたのか？手負いの獣君。俺はアイザワ・タクミ。この一味に加わる事になった。よろしくな！腹、怪我してるんだろ？診てやろうか？」

「・・・俺はロロノア・ゾロだ。この程度の怪我は何でもねェ！お前は医者か？そうは見えねェが」

「俺はハンターだ！生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。いろんな場所に行く都合でサバイバル技術として医術と料理は少し齧ってるンだよ。治療がいらないならこの良治の水はどうだ？次の目的地までひまなんだろ？、付き合ってくれよ」

ゾロにはこれだ！！ガイモン特製の濁酒を掲げるとゾロは笑みを浮かべる

「いいねェ俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えらんねェからな」

「見たことないお酒ね！わたしもつきあうわよ？」

「俺の親父の自慢の酒さね！たっぷり積んだんだ！さぁ呑もう！！」

それから数時間、三人からこれまでの航海のことを聞きながら呑んだ。ゾロは酒を飲むときはそれなりに陽気になるようだしナミも楽しそうだ。いい飲み友になれそうだ。

～Ｓｉｄｅ　ゾロ～

初めてコイツを眼にした時は久々に血が騒いだ。カバジとかいう曲芸野郎なんかと戦ったが何の収穫にもならなかった。剣士としてのはるか高み、その頂点、大剣豪。俺はくいなに誓ったんだ！俺が警戒しながら声をかけたのにコイツは俺の事を手負いの獣なんてからかったかと思えば、名を名乗りそして一味に加わったのだと俺に告げ、治療を提案してきた。

俺も名を名乗り、治療は拒否する。正直コイツは医者には見えねェ！刀を持ってる風でもねえのにコイツからは剣士のような獣のような威圧感を感じる。だが見た目は隙だらけ。俺が困惑しているとちょっと苦笑いしながら

「俺はハンターだ！生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。いろんな場所に行く都合でサバイバル技術として医術と料理は少し齧ってるンだよ。治療がいらないならこの良治の水はどうだ？次の目的地までひまなんだろ？、付き合ってくれよ」

なんとなく解ったコイツは警戒を解くために隙をみせ、同じ酒を飲み交わすことで仲間になろうとしているんだ俺も警戒を解いたフリをして

「いいねェ俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えらんねェからな」

言外に鍛錬の代わりであると伝える。コイツは鈍そうな風でもねェのに俺の言葉を素直に受け取った様に親父の自慢の酒とやらを出してきた。たいした役者だ。

ナミも交えて酒を酌み交わしはじめてどれくらい経っただろう。当初の俺の疑念は霧散し、今は俺もこころから酒を楽しんでいる。様々な言葉を交わしたがタクミの言葉には嘘も裏も無い。眼を見りゃ解る。話を聞くにこいつから放たれる威圧感は悪魔の実とタクミが習得している武術にあるようだ。凶暴性を高める悪魔の実の力をタクミは精神力で押さえ込んでいるらしい。夢のため、タクミは鋼の精神を持っているのだろう。タクミの夢なら少しぐらい手伝ってやってもいい、仲間でいる方が面白そうだ。

でも1回くらい戦ってみてェな・・・・酔った振りして1回くらい駄目かな?

〜Ｓｉｄｅ　ルフィ〜

俺は酒を飲まねェから肴の干物をずっと齧りながら時々話しに参加した。三人は楽しそうに酒を飲みながら以前からの仲間のように打ち解けている。それはいい、・・・でもよ

「タクミ・・・・・・魚肉は？」

〜Side Out〜

「あっ！？」

ナミとゾロと俺と（後書き）

このあとは暫く魚釣りタイムでしょうね。

ナミの気持ち（前書き）

評価5をくれたどこかのアナタ！！感想を！！感想を下さい！！！！めっちゃ嬉しかったデス！！！

ナミの気持ち

穏やかな波の上を1隻の舟は漂う。

「タクミ・・・なんか雰囲気悪いんだけど、どうにかならないの？」

「・・・・・酒」

はいっ只今の俺はメチャクチャ不機嫌です！！何故かって？それはガイモンブランドの濁酒が僅か3日で無くなったから・・・・ありえねぇ・・・・まあね、3人で楽しく呑んだんなら俺だって納得だよ！？でも犯人は単独犯！！

俺の視線をこの2日間一手に引きつけるこの男！麦わらのルフィ！！毎日酒盛りしている俺たちが羨ましかったのかルフィは俺たちが寝静まった真夜中こっそり濁酒を呑みそして暴れた。それをみてさすがに俺も頭にきたがルフィには効かない拳骨でその怒りを若干発散し、爆発寸前だった俺をゾロが何か諌めた。

まあ俺も悪いんだけどね。ルフィが酒に強い描写がなかったから、なんとなく危険を感じ、3日目に酒と肴の美味さを語る俺に自分も飲みたいと言い出したとき、適当なことを言ってあしらった。あのとき飲ませておけば暴れだしても何とか止められただろうに。予想通り酒に弱くさらには極度の酒乱であったルフィは暴れて酒樽と舟一隻を大破させた。

でもそんなことでは納得いかなくいじけている俺に対して、我慢できないナミは珍獣島に一度引き返す事を提案したぐらいだ。俺もいったん了承しかけたがあれだけ仰々しく別れを告げたにも関わらず1週間で帰郷するのはさすがに気まずいので断った。

このままグランドラインへと向かうには装備（船）と準備（酒）が不足しているというナミの意見に従い舟は一路シロップ村を目指す。

～Ｓｉｄｅ　ナミ～

「はぁ～」

わたしは今日何度目か解らない溜め息をつく、ルフィは「肉」以外の単語を知らないみたいだし、ゾロはだいたい昼寝をしている。何より溜め息の原因はタクミ、2日前夜中に物音がしたので起きてみれば、割れた酒樽の近くで暴れているルフィとそれを見て固まっているタクミ。あのお酒はガイモンさんが作ったお酒らしくタクミに取っては大切なもの。きっと飲み終わっても樽は取っておくつもりだっただろう。

タクミの性格上、怒り狂うことは無くても悲しんでいるはずだ。せめて慰めてあげようと1歩足を進めるとタクミが目の前から消え轟音と共にルフィが床にめり込んでいた。起き上がり尚も暴れようとするルフィを捕まえゾロが眠っている舟の方向に思いっきり投げつけた。

舟は大破し海に浸かってもう暴れなくなったルフィを抱えてゾロがこちらの舟にやってきた。ゾロに文句を言われてタクミは段々と落ち着いていったようだが今のはなんだったんだろう。本当に消えたように見えた、タクミならもしかしてアーロンに勝てるかも？と一瞬考えたが慌てて首を振る。

東の海（イーストブルー）にアーロンに勝てる海賊も海兵もいない！そんなのはココヤシ村では常識だ！村はわたしが守る。

翌日のタクミはいつも通りの態度ではあったが雰囲気が違う。ルフィは酔っていた間の記憶がすっかり無くなっているようで

「何か酔っ払って迷惑かけたらしいな！！ごめん！！」

とノリは軽いが謝っていたのでタクミは赦したのだろうが・・・ダメだ！！この雰囲気にわたしが耐えられない。タクミにはいつものように笑っていて欲しいから一度引き返そうかと提案したが寂しそうに断られた。この間の事を恐がってると思われたのだろうか？

そんな事は別に無いタクミは優しいし気を使う事ができる人間だ。ルフィがゴムだから殴って止められないと思ってゾロのいる海に投げたのだろう事は解ってる。まあ加減と方向を若干間違えたようだったけど。誤解を解こうかと思ったけど止めた何を考えているんだろういずれ裏切る事になるタクミにどう思われたって関係ない！

でも近づいているであろう別れを想うとちょっとだけ寂しくなる。ちゃんと裏切る事ができるのかなこいつらいいヤツだもんなぁ・・・

とりあえず物資補給の為、まあ落ち込んでいるタクミの為にお酒を買ってあげたいという気持ちが強いのだが、南のシロップ村に立ち寄る事にする。

残り少ない航海をわたしは出来るだけ楽しもうと思う。

～Ｓｉｄｅ　ルフィ～

「肉を食うぞ！！！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

ナミの気持ち（後書き）

何かルフィがネタキャラになってる。

キャアプテ～～～～～ン・ウソップ！！！（笑）（前書き）

ウソップ好きなんですよね。この小説のウソップはかなりはっちゃける予定です。

キャアプテ～～～～～ン・ウソップ！！！（笑）

「あったなーー本当に大陸が！」

「なに言ってんの？ナミは優秀な航海士だよ？」

「はいはい。褒めてもお酒ぐらいしか買ってあげないわよ」

「ナミ・・・・流石だな」

すかさずキリッと顔を作ってナミを讃える言葉をかけるゾロ、そんなに酒が飲みたいのか？

「タクミに買うのよ？欲しければわたしを讃え敬いつつ、タクミに配給を願いなさい」

芝居がかった調子でそう告げるナミはノリノリだった。

「タクミ・・・・何か扱いが違くねェか？」

「仕方ないんじゃない？この舟では今、俺が代理コックみたいなもんだから。海の上でコックに逆らったらデスるかもよ？求めよ！されど渡さん！！・・・みたいな（笑）」

「お前・・・性格悪くなってきてねェか？」

ゾロがジト目で睨んでくる

「親離れしたから？それよりナミがお酒買ってくれるみたいだし、久しぶりに昼間から呑まない？」

「・・・そうだなじゃあ行くか」

ゾロは納得していないようだが取り敢えず舟から降り、地面が久しぶりとかボヤキながら伸びをしている。性格は元から悪い方だと思う、昔は同僚から腹黒王子と呼ばれていた。褒め言葉として受け取った上で一発殴っといたのは言うまでも無い。後、ルフィに壊された酒樽のことで未だにいじけているのは否定はしない。

「あいつら何だ？」

ゾロの言葉で我に返ると崖の上にはウソップ海賊団の面々、俺、ウソップは結構好きなんだよね♪

「「「うわあああああ見つかったァ～～～～～～～～～～～～～っ！！！」」」

子供たちは一様に逃げだした。俺がゆっくりと舟から降りてくる間にウソップもこちらに下りてきて俺たち四人を見据えて口上を述べる。にしても鼻長いな～～～～！！

～Ｓｉｄｅ　ウソップ～

やべぇ、・・・・やべぇ！！！！！

まじでやべぇ、今、俺の前にはあの”懸賞金千五百万　道化のバギー”の一味のクルーが四人いる。小型船１隻に船員四人と聞いてやってきたが女はともかくこの男三人はやべぇ！！！なんかオーラみたいなのが視える気がするし、後から降りてきた銀髪はやけにニヤニヤしながら俺を見てるなんか特に鼻を見てる、いや凝視してる。

・・・・はっ！！まさかコイツ「新種発見！！！鼻長族か？売ればいい値がつきそうだぜ！！」みたいなことを考えているんじゃ？マ

ズイ！！ここはやはり得意のハッタリで切り抜けるしかねェ！！！

「おれはこの村に君臨する大海賊団を率いるウソップ！！！人び「うそでしょ」ゲッ！！ばれた！！」

「そんなことはどうでもいいから、わたし達は略奪しに来たんじゃないんだから。取り敢えず食事が出来るところに案内してくれるかしら？」

オレンジ髪の女が俺の嘘口上を途中で見破った！！！！この女もやはり警戒しておくべきだったのか。おのれ策士め！！！幸い村を襲いにきたわけでは無いようだし素直に案内でもするか。・・・・待てよあの女即座に俺の嘘を見破ったって事は、俺の上を行く嘘吐きのプロ！！！嘘の伝道者で『唯一絶対究極嘘吐き神』に違いねェ！！！

危うく騙されるところだった！よし、このまま森の中に設置してあるウソップ海賊団の究極の落とし穴に落としてやろう

「な～んだ！！それならそうと早く言えよ！よし俺がこの村1番の飯屋に案内してやるよ！！」

「はっはっはっはっは、おっまえ面白ェなーーーー！！一人で何個の顔ができんだ？？」

麦わら帽子をかぶった男が俺が悩んでいる間の百面相に爆笑していた。この”ホコリのウソップ”としてはコケにされてムカつく限りだが甘んじて受け入れてやろう。振り返り、「ついてきな」と声をかけようとしたそのとき銀髪が不意に俺の鼻を掴んだ。

「やっぱ面白い鼻だね！鼻長族かい？」

やっぱりぃ～～～～～～～～！！！！俺は恐怖のあまり意識を手放した。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「うわっ！！おいっ、大丈夫か！？」

「タクミ・・・・ソイツ失禁してるぞ」

「はっはっはっはっはっは！！！やっぱこいつ面白ェーーー！！」

「村１番の飯屋はどうなったのよ？」

・・・・・・どうしてこうなった。

キャアプテ～～～～～ン・ウソップ！！！（笑）（後書き）

いかがですか、うちのウソップはハンパないネガッ鼻です。

感想・評価をお待ちしております！

ナミ早期救済を目指して（前書き）

原作読んでて疑問に思ったことを解決させて貰います。

両方の評価に5をつけてくれた人が5人もいるみたいです。

なに？俺を泣かせたいの？できれば感想を書いて欲しいです。お礼を言いたいので。

「どうもありがと～～～！！！」オカザイル面白かったです。

ナミ早期救済を目指して

復活したウソップに1番話が通じそうだったゾロから説明をさせ誤解は解けたっぽい？そんなウソップにつれられて（もちろんちゃんと着替えに帰らせました）やってきた村1番の飯屋でただいま会食中ですよ。ナミはウソップからカヤさんの事とかいろいろ聞いてるみたいだけど俺はゾロと二人で地酒の飲み比べ。気に入った酒をナミにメリー号いっぱい買ってもらうつもりなんだよね♪

ちなみにルフィはどちらも興味が無いようで肉に夢中。まぁ俺らの方に加わろうものなら問答無用で叩き出すが、せめてメリー号が関連するナミとウソップの会話には加わろうよ。

「タクミはシャンパンが好きなのか？でもそいつは樽では買えねェからあんまり量は積めねェんじゃねェか？」

黙って飲んでいたゾロに不意に話しかけられ素で応える

「いいんだよこれはここで呑むだけで、『シャンパン以外は呑みたくない』とか上客に言ってた新人時代を思い出すんだ」

「・・・何の新人だよ・・・ってそれは夜の店のことだよなァ！？お前7歳からあの島に居たんだろ？しかもそれ以前の記憶は無いって・・・どういうことだ？」

「えっ!?・・・・・・冗談だよ?」

ゾロはニヤニヤしながら追撃してくる

「今、一瞬慌ててただろ?白状しろよ」

「ジョ〜〜〜〜〜〜ダンじゃなーーーーーいわよーーーーーーう!!!」

「オカマバーーーー!!!!・・・流石にそれは冗談だろう。話したくねェなら別にいい。」

「ごめんねぇ」

「・・・なんかもう普段の口調がオカマっぽく聞こえてきやがった。もうこの話題には触れねェことにする」

そう言ってゾロは飲み比べを再開する。・・・いやぁ危なかったぁ流石に原作主要キャラに転生者をカミングアウトするわけにはいかないもんねぇ。うまいこと誤魔化すことに成功したようだ。ありがとうベンサム!!

ていうかこっちにもあるんだ、ホストクラブとかオカマバーとか。
ゾロがそんなの知ってたのも驚いたが、・・・酒好きだから？
そんな寸劇を終えて俺も飲み比べを再開していると
「おまえら・・・・おれが船長（キャプテン）になってやってもいいぜ！！！」
と話の流れは知らんがウソップが言ってきたので
「「「「ごめんなさい」」」」
「はえェな　おい！！」
アイコンタクトも無く俺たちは華麗なユニゾンアタックをかました。

あの後、お野菜三人組とも寸劇をこなして、ルフィ、ゾロ、ナミの三人はカヤの屋敷へ直接交渉に向かった。
俺は何をしているかというと原作で気になっていた事を思い出したので一人、別行動を取っている。気になる点はあの”百計のクロ”

何の報いも受けていないことだ。ルフィは相手を殺さずに決着をつけるがそれは甘い！クロは戦闘後、ジャンゴの抜けたクロネコ海賊団に復帰し、海賊を続けている。これを何とかできないだろうか？

俺には策がある。しかもそれはナミの精神的早期救済になるのだ。俺は交渉のシュミレーションを終え、村の駐在所の電伝虫を手に取る。

「・・・こちら海軍第１６支部」

「はじめまして、俺は賞金稼ぎのタクミっていう者です。重要な話をお伝えしたいので、ネズミ大佐にお繋ぎ願えますか？大佐の出世に関わるお話だとお伝え下さい」

「なんだ貴様！？そんなふざけた電話を繋げるわけ無いだろう！！！」

「あれ？いいんですか？大佐はそこの支部長でしょ？大佐の利益になることを伝えなかったら後でどうなっても知りませんよ？おそらく今日の電話対応者全員がまとめて処分されます。後日そちらに伺う予定もありますしね」

「・・・わ、わかった。くれぐれもわたしが最初に渋ったということは大佐に話さないでくれ」

「了解しました」

よっしゃあ食いついた！第1段階クリア！！やっぱりね、この支部も腐ってる。東の海のダメ支部はシェルズタウンのモーガンがいない以上ここしか知らないから。断られたらどうしようか焦ったよ

「・・・・わたしが第１６支部大佐のネズミだ。有益な情報っていうのは本当だろうな？」

「もちろんですよ、大佐殿。大佐は”百計のクロ”をご存知ですか？」

「無論知っている。我々海軍が捉え3年前に処刑した」

「聡明ですね、でもこれはご存じないでしょう・・・・クロは生きています」

「！！！！何っ！？それは本当か？」

「確かな情報で潜伏先も突き止め、しかもわたしにはクロを倒す術がある・・・・・・大佐・・・・・・海軍を欺き逃亡したクロを捕

らえたという手柄、欲しくはありませんか？大佐が別ルートで換金しても構いませんよ？」

「・・・チチチチ・・・そういうことか、で、いくら欲しいのかね賞金稼ぎくん」

「話が早くて助かりますね・・・・そうですね、当時の懸賞金が千六百万ベリー、海軍船全滅プラス海軍に対する偽装工作、さらに現クロネコ海賊団幹部ブチとシャムをお付けして何とたったの一千万ベリー・・・いかかでしょうか？」

「チチチチ・・・・破格だな。君は実に世渡りがうまい・・・いいだろうその話のろうじゃないか」

「ありがとうございます♪低価格設定なので、ついでに小さなお願いしてもよろしいですか？」

「言ってみたまえ」

「受け渡し場所はシロップ村、そこまで迎えに来ていただいた後、その場で賞金を受け取り海上レストラン『バラティエ』まで送っていただきたいんですけど」

「かまわんよ。そのかわり今後君が捕らえた賞金首はすべてわたしを仲介に通して換金してもらう。それとクロは決して殺さずに無力化するんだ」

「了解しました。いつ頃こちらに到着しますか？」

「海軍船で全速3日といったところだろう」

「それなら大丈夫です。では3日後の夕刻シロップ村南の海岸で」

「楽しみにしてるよ賞金稼ぎくん・・・では」

ガチャ・・

完璧だ（笑）大成功！！！ネズミなら絶対乗ってくると思った。海軍船ならバラティエでのクリーク戦に間に合うだろ。賞金首になっていない今だからこそ使える悪魔的奇手！！ナミの一億ベリーは原作であと七百万ベリーって言ってたからどれだけ酒買っても一千万ベリー足せば足りるだろうね。アーロンは約束は守る、ナミはそう信じているからそれだけで救われるだろう。まぁどっちにしろアーロンパークは潰すしね。アーロンがすんなりお金を受け取っても後から奪還します。

悪巧みもすんだことだし、あすの戦いに備えて呑み直しますか★

ナミ早期救済を目指して（後書き）

タクミ真っ黒です。

ウソップの決意（前書き）

すみません。ここはあんまりいじりたくなかったんですが・・・

ウソップの決意

ゾロと飲み直そうと思ったんだけど見当たらないから南の海岸で一人酒の真っ最中です。

「タクミ!?アンタこんな所に居たの」

「あ、ナミ、買ってもらうお酒はこれがいいかな、１０樽位買っておいてね♪」

「そんなに載るわけ無いでしょうが!!」

がつんっ!!殴らなくてもイイのに

「痛いよ!!、お嬢様に船貰うんじゃなかったっけ?」

「今、そんな状況じゃないのよ!!」

「ん～?どうした?そういえば長鼻くんが元気ないみたいだけど」

ナミが深刻そうな顔で話し始める

「この村が明日襲われるのよ・・・クロネコ海賊団って海賊にね。この海岸から進攻してくるって情報を事前に掴めたのは幸いだったんだけど問題は首謀者が村人からの信頼も厚いクラハドールっていう執事ってことなのよ」

「何か問題がある？上陸地点が解ってるんなら船寄せる前に殲滅すれば？その執事の事だって実際に計画を話してるのを見たし聞いたって言えば問題無いと思うけど？」

「殲滅ってそんな事・・・出来そうね、タクミなら。でも住人の避難は難しいわ」

「なんで？」

ウソップが絞り出すような声で語りだす

「・・・あの執事が話してるのを聴いたのはお前んとこの船長とおれなんだ。コイツはよそ者だから問題外だし、・・・・おれは嘘吐きだからよ、信じて貰えずにこのザマだ」

銃創がある左腕を押さえながらウソップが俯いている

「腕に銃弾ブチ込まれようともよ・・・ホウキ持って追っかけ回されようともよ・・・ここはおれの育った村だ！！おれはこの村が大好きだ！！みんなを守りたい・・・！！！こんなわけもわからねェうちに・・・みんなを殺されてたまるかよ！！！」

涙を押さえ込んで立ち上がるウソップを俺は真っ直ぐに見据える

「だからおれはこの海岸で海賊どもを迎え撃ち！！この一件を嘘にする！！！！それが嘘吐きとして！！おれの通すべき筋ってもんだ！！！！！」

やっぱウソップはキメるときはキメるねぇ！かっこいいよ！でもまぁ嘘は良くないね、戦闘時以外ではあんまり嘘吐かないほうがイイと思うよ。ちょっと自業自得な感じもするけどなかなかの心意気をみせて貰ったし、俺も助けましょうか。

「ルフィ？俺は助けてあげたいんだけど、どうする？上陸地点はここなんだろ？俺なら近づいた瞬間に船ごと殲滅できると思うし」

「あぁ、でもおれ達も加勢「言っとくけど宝は全部わたしの物よ！」・・・するぞ」

～Ｓｉｄｅ　ウソップ～

こいつら馬鹿なのか？相手はクロネコ海賊団、Ｃ・クロの賞金は確か一千六百万ベリー。俺は決死の覚悟で狡い手を（矛盾してない！）使うつもりだったのに、銀髪は無茶苦茶な殲滅計画を次々と発表し船長は面白くないからと却下しまくる。

こいつらには緊張感の欠片も無い結局おれ一人で戦うようなもんだ。決戦を想像し足が震える。毬藻頭がこっちを黙ってみてやがる。

「見世物じゃねェぞ！！！怖ェもんは怖ェんだ！！ふざけた計画立てて馬鹿にしてんなら帰れ！」

「笑ってやしねェだろ？立派だと思うからおれは手を貸すんだ！だいたいタクミの計画はおそらく全部実現可能な計画だと思うぞ？」

はい？？？銀髪の計画って遠距離から大岩ブン投げるとか、船まで跳んでいって単純に蹂躙するとか聞いて損したって言うような計画ばかりだぞ？それが実現可能？一体何なんだこいつら？

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

どうせ反対側の海岸に上陸すると知ってる俺はふざけた事ばかり提案して遊んでいたらウソップが全員に何が出来るかを聞いてきたので答える

「斬る」「のびる」「狩る」「盗む」「隠れる」

そんなコントをしながら結局おれの遊撃作とウソップの狡い作戦（油坂）の2段構えになった。夜明けと共に攻め入ってくる予定のクロネコ海賊団対策は意味無く完璧！いつまでも船が見えないので流石にみんな不審がってるけどもう北の海岸付近に上陸してるころだろう。一味での初戦闘を前に血が滾ってきた

「なんか北から声が聞こえないか？」

みんなに聞こえそうな音になったあたりでウソップの様子を見てみると・・・・立ったまま泡を吹いていた・・・

・・・・・だからどうしてこうなった

ウソップの決意（後書き）

次回はウソップサイドからＶＳクロネコ海賊団が開戦します。

VSクロネコ海賊団（前書き）

ルフィが空気ですね。

VSクロネコ海賊団

～Ｓｉｄｅ　ウソップ～

自信満々で待ち構えるこいつらにどっか安心していた部分があったのかもしれねェ。船が見えたら銀髪が跳んでって（飛ぶ　では無いらしい）上陸前に片付けるそうだ。瞬殺出来ないような敵が乗っていた場合は即帰還、五人で迎え撃つらしい。

跳んでいく！？この点には銀髪の仲間三人も若干驚いてはいたが「タクミは何でもありね！」とのオレンジ髪の意見でなんか納得していた。この銀髪の実力を早くこの眼で見てみてェな！そんなことを考えていると朝日が見えてきた。

・・・・・・・あれ？？？？

完全な夜明けがきたってェのにクロネコ海賊団の姿は欠片も見あたらねェ！？四人とも不審な顔をしているが銀髪の様子がおかしい。長い髪がざわざわと総毛立ちそれを注視しているといつの間にか顔

が獅子になり肢体も獣のそれに変貌を遂げていた。

「なんか北から声が聞こえないか？」

銀髪の獅子の唸るような言葉を聞きながらおれの意識は途切れたんだ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

泡吹いてるウソップを起こそうとして手を伸ばしたらいつの間にか人獣化してた。そりゃあウソップも泡吹くわな（笑）俺は一人納得し、寧ろ話していたはいたが初見で眉ひとつ動かさないゾロに驚いたね。俺のことを仲間だと思ってくれてるからだろう！うれしかった！！

人獣形態での初めての対人戦闘に興奮してたんだろうけど未だに制御が完璧に出来ていないとは情けない・・・はっ！？それより早くウソップ起こさないと！！

～Ｓｉｄｅ　ウソップ～

「・・・・・ん??ぎゃーーーーーーー!!!!ライオンにんげんーーーーーーーーーー!!!!!やっぱ夢じゃなかった（泣）」

目を覚ますとやっぱり銀色の獅子は居たおれはもう死ぬんだぁーーーーー!!!!

「ウソップ??驚かせてごめんな、説明しそびれてたんだけど俺とルフィは悪魔の実の能力者で、ライオン人間とゴム人間なんだよ。ちょっと戦いが待ちどうしくて能力の押さえが利かなくなってね、別に海岸を間違えたウソップを噛み殺そうとしたわけじゃないと思うからから安心してくれ！」

冗談にもなってねェよ・・・タクミって言ったっけ?こいつからはまだ抑えきれない殺気みてぇなのが漏れてきてる。にしても海の秘宝”悪魔の実”か始めてみたぜ!!船長のほうはゴム人間・・・だから崖から落ちても無傷だったわけか!!!まったく出鱈目な力だ、おそらくタクミはライオンのパワーを持っているんだろう。そこからくる自信だったわけだ

「おーぃ!!聞いてるか?海岸間違えたんだろ?早くいかないと厄介なことになるよ?」

「そうだこうしちゃいられねェ早く北の海岸に行かねェと!!!」

「よーし、じゃあ俺はウソップ連れて先に行くから、ナミはそこの迷子顔の二人を連れて来てくれ」

「誰が迷子顔だこらァ！！！」

タクミは俺を小脇に抱えてそんなことをのたまった

「は？おいっ！？なんだ？自分で走るぞ！俺は脚には自信があるんだーーーーーーーーーーーーーー！！！」

なんだこれ！？景色が見えねェくれえのスピードで流れていきやがる！！・・・っ！・・・身体が潰れそうだ！！！！なんか話しかけてきてるみてェだけど聞こえやしねェってのあぁーーーーーー！！！！

「急に止まるなクラァ！！！死ぬかと思ったわぁーーーーーー！！！！」

「つっても、もう着いたぞ？北の海岸」

は？そこには俺同様に口をぽかんと開ける海賊たちが大勢いた。

～Ｓｉｄｅ　ナミ～

「誰が迷子顔だこらァ！！！」

「は？おいっ！？なんだ？自分で走るぞ！俺は脚には自信があるんだーーーーーーーーーーーーー！！！」

タクミの発言にゾロが憤慨し、ウソップが抗議をしてる途中でタクミはウソップを抱えて風のように消えてしまった。あいかわらずとんでもないスピードね！わたしたちも早く行かなきゃね、北の海岸にはわたしのお宝があるんだから！！！

「北へ真っ直ぐーーーー！！！」

「ちょっと待ってルフィ！！そっちは東よーーー！！・・・・ダメだわ早く追いかけな・・きゃああ「おいナミ！！何やってんだ」助けて落ちるっ！！」

ウソップが撒いていた油に足をとられて滑り落ちそう、でも大丈夫ゾロの服に手が届いたから

「は！？」

つるん！！～べちゃ！！　キラッ☆

「うわあああああっ！！手ェ離せバカ！！「ありがとゾロ！！」」

だん！「う」　だん！「が」　だん！！「がっ！！」

わたしは犠牲となったゾロに感謝を込めてその背中を三段跳びで駆け上がった！

「のわぁ～～～～～～～～」

ゾロはまぬけな叫びをあげながらツルツルと油坂を滑り落ちていった

「わるいっ！宝が危ないの！！」

わたしはルフィを連れ戻すのを諦めて全速力で北の海岸へと向かう。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

さて北の海岸に着いた今、目の前には呆然とした表情で固まっているクロネコ海賊団の面々、まあ自分たちの進む道の先に突然ライオン人間と長鼻族なんかが現れたら驚くわなぁ。ま、動かないならちょうどいいしさくっと潰させてもらおうかクロネコ海賊団！！

～Ｓｉｄｅ　ウソップ～

「俺はあの船長を潰すから、ルフィとゾロが来るまで他の連中の足止めをよろしく頼む！！」

未だに固まっていたおれにそう告げるとタクミはさらに巨大化して駆け出していった。先ほどよりスピードは落ちるようだがあれがタクミの全力の姿なのだろう飛び道具使いの船長の下へ真っ直ぐに本当にまっすぐに進んでいく。進路を阻む者を紙屑のように屠っていく。

おれはその姿に震えていたこれは恐怖じゃなくてたぶん憧れ、これが海賊！！”勇敢なる海の戦士”おれはたぶんあんなに強くはなれないだろけどそれでもおれは海に出よう！早いほうがいいこの戦いが終わったらすぐにでも！！

そんなことばかり考えていたらおれの頭を味わったことの無いような衝撃が襲った！！？そうだタクミは敵をすべて倒しながら進んだ

わけじゃないんだおれの力を信じてこの坂道での敵の足止めを任せてくれたんだ。それえなのにおれは・・・

「！！！」

声も出ねェ・・・・でも、もう情けなく気絶なんかしないおれの心はもう”勇敢なる海の戦士”なんだ！！気力だけで身体を動かしてこっそりとパチンコに手をかける

「おい！お前ら早くいくぞ！！あの化け物には船長かニャーバン・兄弟（ブラザーズ）しか勝てない！！俺達はC・（キャプテン）クロの計画を狂わせないことだけ考えてりゃいいんだ！！計画が狂ったらそれこそ殺されっっっがぁは！！？」

「へっ！！この坂道・・・たとえ死んでもお前らを通すわけにはいかねェ！！！おれはいつも通り嘘を吐いただけだから！！！・・・・村ではいつも通りの１日が始まるだけなんだから！！！」

おれはゆっくりと立ち上がる、さあこい！！キャプテン・ウソップ様の本領はここからだぜ！！！

「トラっ！！大丈夫かっ！？このクソガキふざけやがって！死ねェ！！！」

今度はカトラス良く手入れされてやがる・・・・ははっ、２発目の

発射準備は整ってるんだ狙いは外さない！！気力雄雄しくおれは雄たけびを上げる

「うおぉぉぉぉぉ！！！！！」

・・・っ！！？立ちくらみ！？・・・やべぇ、滑り落ちていくおれのパチンコ、まっすぐに迫ってくるカトラスの突き。

おれの世界はスローモーションだった。。。

VSクロネコ海賊団（後書き）

視点が変わりすぎて読みにくいですね。しかも長い。反省してます。

ウソップをかっこよく書きたかったんです。

シュレーディンガーのクロネコたち（前書き）

初めて感想をもらえたのですが酷評でした。

・「ルフィのキャラが変」そうですよね。迷走してる自覚があります。かっこいい台詞を考えてはみるのですがルフィはとくに原作の台詞が強すぎて丸写しになりかねないので、結果ネタキャラ（ていうか空気キャラ）になってますね。何とかしたいと思ってます。

・「主人公の喋り方が気持ち悪い」この意見があまりに多かったので全改稿しました。

感想・評価お待ちしています。

シュレーディンガーのクロネコたち

俺は坂道の防衛をウソップに任せ、俺は人獣時に常時展開の「紙絵武身」を解除して坂道を駆け下る。ナミと二人である程度持ちこたえてたんだから俺が数を減らせばまあ大丈夫だろ。

ジャンゴを捕捉して正面突破を試みる。森の番人をしていた頃は獣形態で脅しをかけ引かない場合はそのまま噛み殺していた。だから人獣形態での戦闘は今回が初、「紙絵武身」の性能と一番不安な「紙絵」そのものはクロで試せばいいだろう。それぐらいの相手じゃないとテストにならない。

先頭の男は単独で武器はサーベルなので不安だった「鉄塊」を試してみる

「鉄塊　剛」

キィン！！

「なっ！？髪で受け止め「咬指銃」グボァ！？」

余計なことを言わないで欲しいねぇ、身体で受け止めるのは怖いもんは怖い。まあこれでこの船の雑魚クラスは「鬣　鉄塊　剛」で受けきれることがわかったし・・・「獅子鉄塊」とかいったほうが様になるだろうか？

「咬指銃」が人に与えるダメージも大体わかった。うん、やりすぎた「指銃」は指に「鉄塊」をかけて高速で打ち抜く技（原作の理論

がどうかは知らないけど）「咬指銃」は5本の指すべての第1関節までに「鉄塊」をかけて打ち込み後は鍛えた握力で力任せに肉を掴み抉り取る。アーロンを真似て修行した技。本家とどちらが強いのだろう？結果タマ（仮）のお腹は左から1／3ほどが無くなり鮮血が噴出すってゆうか溢れてる、致命傷だね、綺麗だね、何か叫んでるような気もするけどスルーで！

タマ（仮）君の犠牲はもちろん忘れるけど俺の力の礎になるんだ、そうコイツらは哀れなシュレーディンガーのクロネコ。後は原作の「六式」応用技を試すことにするからまあがんばって。

「なっ何なんだお前は・・・ワン・ツー・ジャンぐぉぽべぽ！！！」

「あれ？」

うん、またやりすぎた、珍しく反省はしてる。ダメだ「紙絵武身」を解除しての人獣形態は血を見て湧き上がる凶暴性を抑えきれない。ジャンゴに催眠術をかけられそうになってとっさに「獣厳」かますまで気づかなかった。

チョッパーになんとか出来るのか？まぁそれまでは単独戦闘時に限定して使用することにするか、何かもう見境無いからな・・・いろいろ試すつもりだったのに接触する前に「嵐脚　線」で無力化、進路外から近づいてきた相手には「咬指銃」、クロネコ海賊団にはジャンゴ以外に飛び道具の使い手がいないようなのでジャンゴだけを見据えて只進んできたわけだが。

被害は甚大・・・たぶん４人くらいは死んでる。すっ飛んでいったけどジャンゴ死んでないよな？まだ原作に関わってきそうだからネズミに引き渡す約束もしなかったし、もちろん殺すつもりも無かった。でもジャンゴは実際怖いだろ？「ワン・ツー・ジャンゴで死にたくなれ」とか言われたら即終了。あの催眠術はそれぐらいの強制力がありそうだからな。・・・・・たぶん生きてるだろ！！なっ！！だってこの世界の人間ってヤツはやたらと打撃には強い！吹っ飛んでもなぜか無事！ワポルとかバギーとかよく生きてたなと感心するよ。よし、ジャンゴは大丈夫のはず。次っ！！

敵を殺しちゃったのは大丈夫かな？なんだかんだで一味は直接殺してないよな？でも、戦いにはみんな覚悟を持って臨んでいるみたいだし、無力化した相手に止めを刺さないと言うだけ・・・まあ大丈夫だろ、みんな1撃で死んでるし。いたぶる様な快楽殺人者には見えないはず。頭に「咬指銃」を受けた船員はかなり酷いことになってるけどスルーで、何かもういろいろスルーで！！！もしも何か突っ込まれそうだったらそれっぽい演説でもかまして、うやむやにしてしまおう。

「うおぉぉぉぉ！！！！」

おっ！勇ましいなウソップ、何人倒したんだ？

・・・・・・・・・

！！？目に映るのは絶体絶命のウソップ！！！慌てて地面を強く蹴る！「紙絵武身」にはタイムラグがあるので解除したまま駆け出す

「「剃」！！！」

頼む！！間に合ってくれ！！！！

～Ｓｉｄｅ　ナミ～

「わたしの宝に手ぇだしたらゆるさないんだから！！」

北の海岸に向かって森を駆け抜ける。タクミが先行しているので問題無いとは思うけどあれはココヤシ村を救う為の大切なモノ。何があっても渡すわけにはいかない。もうすぐ海岸だ万が一に備えて武器を用意していこう・・・無事なんでしょうねタクミ・・・・

「うおぉぉぉぉぉ！！！！」

森を抜けて最初に聞いたのはウソップの雄たけび。てっきりタクミに任せて自分は観戦モードにでも入っているのだろうと想定してた

のにやるじゃない・・・・ウソップに後ろから駆け寄る、！！？武器のパチンコを取り落としカトラスを持った敵が眼前に迫っているのにウソップは動かない、いや動けないんだろう後頭部からの激しい出血がその傷の深さをものがたっている。しょうがないわねぇ助けてあげますか。

わたしは走ってきた勢いそのままにウソップの左後ろから飛び出し、右肩の上まで振り上げていた組立式の棍を、ウソップの鼻に触れる寸前だったカトラスを持つその手に振り下ろした。

べきゃっ！！「！！？」　　・・・カラァン

手首が砕ける確かな感触！！敵はたまらずカトラスを手放す。自分の両手に残る感触に不愉快な気持ちになるが、そうも言っていられない。インパクトの瞬間に絞っていた手を緩め棍を縦に担ぎ直し、一歩で相手と距離を詰める。肩から相手の懐に潜り込んで一本背負いの要領で棍を振るう。

ズガッ！！！「でぇふっ！！！！」　　・・・・・バタッ・・・・

ナミの肩を支点に顎へと放たれたその一撃は容易に敵の意識を刈り取った。

ウソップに一発受けたのであろう足元で悶絶している敵の水月をついでとばかりにヒールで踏み抜く。あまりに流麗に行われた一連の動作を前に周りにいた四人の船員たちとウソップは息を呑む。

「ふぅ、・・・戦うのは好きじゃないのよね、引いてくれない？」

「何だこの女！！？メチャクチャ強ぇぞ！！！」

「三人がかりで行け！！！」

「ふざけんなお前が行けよ！！！」

・・・・ドキャ！　バキ！！　メコッ！！！　ズドンッッ！！！！

「「「「ギャーーーーっ！！！！」」」」

「話を聞かない相手は嫌いだわ！！！」

「『どん！！』って感じだな！」

ウソップがわけが解らない感想をいってくる

「何よそれ？？？」

「まあ気にすんな！！にしてもお前こんなに強かったんだな！！」

「あいつらに比べたら普通よ」

「・・・なるほど（笑）比較対象が規格外だもんなぁ」

「そんなことよりアンタ大丈夫なの？？間欠泉みたいに血が噴出してるわよ？」

ウソップの頭はリアルにそんな感じだったので本気で心配した。

「大丈夫だ！！おれはこの坂を頼むとタクミにまかされたんだから、せめてあいつらが来るまではここにたち続ける！！！」

「なぁにかっこつけてんのよ！！・・・まあいいわ、ほら、肩貸してあげるから」

「・・・・悪ィな、ほんとは結構イッパイいっぱいなんだよな・・・・・」

ちょっとだけ間があったけど割りと素直にしたがってわたしの肩に

身体を預ける。ほんの3分ほど離れていただけなのにウソップは変わっていた。わたしはちょっとだけその姿がカッコイイと思ってしまった。

～Side Out～

シュレーディンガーのクロネコたち（後書き）

うちのナミさん戦えます。まあこれぐらいは出来ないと海賊専門の泥棒なんて無理なんじゃないかなぁと思って書きました。

～Ｓｉｄｅ　○○○～ってやってんのに普通に地の文で三人称がでます。ごめんなさい。直りません。文章を書くのは難しいですね。

殺される覚悟（前書き）

前半と後半でノリが違いすぎる。カオスだ・・・

殺される覚悟

だめだ！！届かない・・・俺なんかが原作に介入したせいで主要キャラクターが死ぬ。そう思ったときウソップの背後からナミが跳び出して来た。

ナミは華麗な棍術で敵を圧倒！！このレベルなら問題無いだろう。「月歩」で崖の上に行き様子を伺うことにするか。重たい身体に苦労しながら崖の上に到着。

「どれどれ・・・・なぁっ！！？」

ナミ強いな！想像以上だ、一人ひとりを一撃で的確に気絶させるなんて！！でも、最後の一人を柄の部分で突いたときズドンッッ！！！！っという音はちょっと・・・・ズドンッッ！！！！って・・・・・あの船員死んだんじゃないか？

ナミの扱ってる武器はよくみると柄の部分が若干太くなっているタイプようだ、力がなくてもアレならうまく使えば相手を昏倒させられるし、捌きやすい。原作では只の棒じゃなかったか？

負傷したウソップに肩なんか貸してるし男前だな！！それじゃぁ「紙絵武身」で二人と合流するか！！

ーーーーーーーースタッ！！！

「驚いたよ！！ナミ強かったんだな、ウソップも勇ましく戦ったみ

たいだしやるじゃないか。それはそうとアタマだいじょうぶか？」

「タクミ無事だったのね♪・・・まあ、当然か」

「ていうかさっきのアレは何だァ！お前メチャクチャだよ！！！みとれて不意打ちくらっちまったじゃねェか！！あと「アタマ大丈夫？」って言うな～！！！なんか馬鹿にされてる気がしたぞ！」

「それだけ元気にツッこめるなら大丈夫だ、どうだ？うちの一味にツッこみ担当で入らないか？ルフィに推薦しとくぞ！」

「ふっ！！ツッこみ兼船長（キャプテン）ってことだろう？まあ、入ってやってもいいぜ！！！・・・ってあほかァ！！！どこの世界にツッこみの腕を買われて船に乗る海賊がいるんだよ！！！！！」

「おぉ！！ノリツッこみも出来るんだな！！ハイスペックでお買い得だな！！」

「えぇえぇ、ついでにパチンコが得意で狙撃手も兼任、手先も器用。こちらのウソップが今なら何と１９８００ベリー・・・ってさすな！！！！」

やっぱウソップおもしろいねぇ♪

「ウソップ、もう止めときなさいきっとタクミは際限なくボケ倒すつもりだから、そんなテンションで突っ込み続けたら出血多量で死ぬわよ。・・・あなた死ぬわよ！！！！！」

「ぎゃ～～～～～～～～～～～～～！！！！！俺は死ぬのかァ～～～～～～～～～！！！！！」

一見心配しているようでその実ナミまでからかい始めた。・・・・・哀れウソップ（笑）

「ナミ！！！てめェ！！！よくも　俺を足蹴にしやがったな！！！！！」

「タクミ！！！ウソップ！！！　北ってどっちかちゃんと言っとけぇ！！！！」

やっぱりゾロはナミの足場にされたのか、ルフィはもしかしたらナミと一緒にくるかもって期待してたんだけどやっぱルフィもファンタジスタだったか。

「遅かったな、二人でどっか遊びにでも行ってたのか？ナミと一緒に来るように言ったと思うんだが？」

「そいつがおれをお「まぁいいじゃない、わたしたち三人でほぼ壊滅させちゃってるし」・・おぃ聞けェ！！て「タクミ、状況を説明してあげたら？」・・・・・もういい」

「・・・・・・・・」

ゾロはナミに被せられて諦めたみたいだけど、ルフィが言い訳しないねぇ、明確な指示が出てたのに暴走した自覚があるのか？まあいい。

「じゃあ説明する、二人が来るまでの間に俺が船長に特攻をかけて成功、船長はどっかに飛んでいってクルーも１０人くらいは無力化した。その間の坂道の死守をウソップに任せてウソップが負傷、ナミが助太刀にはいって６人・・・正確には５人か、１人はウソップがほぼ追い詰めてたしまあとにかく６人無力化に成功で今に至るってわけだ敵残存勢力は大体船の前でほうけてる１０人くらいだな」

「無力化って頭が無くなってんのはありゃ何があったんだ？」

「死角から攻撃されたから掴める所を全力で掴んだらああなった。まあもとから加減はしていないが」

「以外だな無闇に生態系を荒らすなっていつもいってるから殺さねェように闘うタイプだと思ってたぜ」

ここだ！！ここでそれっぽい説教をかませばゾロの前で今後の実験に加減はいらないはず。

「？？？可笑しなこというんだな？？俺は海賊はみんな「殺される覚悟」のあるヤツ等だと思ってたんだが違うのか？俺は命をかけて叶えたい夢があるからこの船に乗ったんだ。だからどこで死ぬことになっても構わない、まぁ全力で抗いはするけどな。海賊はみんな理由は違えど信念を持って船にのってる。そんな相手に加減をするのは失礼だと思う、だから俺は戦うのなら全力で戦うことに躊躇なんかしない。それが「殺す覚悟だ」自分のために、そして仲間のためにな」

「「・・・・そうか」」

あれ？何かルフィ達も一緒に聴いてたみたいだ手間が省けて助かった。皆がこちらに視線を向けてくるので取り敢えず微笑んでおく。ていうか敵さんも？何か呆けてた顔に喝が入ったみたいだけど・・・

あれ？

殺される覚悟（後書き）

主人公の後半の長セリフはどっかで聴いたような言葉を繋げただけです。ワンピで読んだのかな？書いてるシーンのあたりを手元に広げて書いているので物語の先で出てくるセリフが出るときがありますがご了承下さい。

稀に意図的に書いてる場合もあります。

感想・評価をお待ちしています。

殺す覚悟（前書き）

初のルフィサイドオンリーです。

殺す覚悟

〜Ｓｉｄｅ　ルフィ〜

北がどっちなのか解んねェから適当に走ってたら目的地に着いたみてェだ。ほぼ同時にきたゾロと一緒になって文句を言う。ゾロはナミのせいで遅れたらしい。遅れてきた理由をタクミに聞かれてゾロはくってかかってる。たぶんタクミはおれ達二人のことをバカにしたみたいだ。タクミの言うことは遠回しな言い方が多かったり、よく解んねェたとえ話をするからあんまり会話が続かねェ。

タクミはたぶんナミと一番仲がいい。舟の上ではよく二人で話してるのを見かけるし、釣りしてるときにおれが話しかけても釣竿の一部になった見てェに動かねェし適当な返事したり無視したり、終いには「集中させてくれ」とか言いながら半獣になって威嚇してくる、でもナミが話しかけたらちゃんと会話をするし、釣りを止めて話しに夢中になったりする事もある。タクミはおれの飯を釣ってくれてんのに。

昼寝ばっかしてて口数の少ないゾロも起きてる間はタクミと楽しそうに話してることが多い。そういう時はだいたい二人は酒を飲んでることが多い。ここでもナミはタクミと一緒にいる。酒を飲んでるときのタクミは難しいことはあまり言わないで珍獣のおっさんや島の動物達の話、それと好きな酒の話をしてることが多い。

だからおれはあの日タクミが酒とつまみの話をしてるタイミングを

見計らって「そんなにうめェんならおれも飲んでみてェな！！！」と言ってみた。酒の話におれが入ってきたのが以外だったのか少し驚いた顔をしてなんか考え込んでたみてぇだ。これで話せる話題が増えると思ってたんだけど「ルフィはお酒飲まないほうがいいんじゃないか？」と言われた。

納得できねェから文句を言ってやったんだけど「実は俺は占いも出来てな、ルフィには酒乱の相が出てるから、お酒飲んだらダメだ」だと、・・・・・馬鹿にされてるんだと始めて自分でわかった思った。いくらなんでも騙されねェ！！！占いには虫眼鏡がいるんだ、常識だ！！！

だからおれは夜中にこっそり飲んでタクミの嘘っぱちを証明してやろうと思ったんだ・・・・けど、2杯くらい飲んだあたりから記憶がねェ・・・・おれは酒を飲んで暴れたらしい、酒乱ってヤツだ。タクミが真っ先に気づいて止めてくれたらしい。

頭の中がぐちゃぐちゃだったが占いのことをゾロに聞いてみると「はっはっはっ！！！タクミなら何でも出来そうだな、それより虫眼鏡使うのは手相占いじゃねえのか？」と言われた。常識だそうだ。

タクミに悪いことをしてしまったと思って謝ったら赦してくれたんだけど酒が無いタクミは釣りに集中するようになってあんまり喋んなかった。ナミとも喋ってないからタクミは本当に元気が無いんだろう。おれにとっての肉みたいなもんなんだと思う。

この村について飯屋で酒を飲むとタクミは元気になってゾロと二人で喋っていた。元気になってよかった。これでタクミが酒が本当に大好きだってことと、占いが出来るってことが解った。短い付き合いだけどおれはタクミの事を信頼してるんだ。

・・・・・・でも

やっぱりおれはタクミの事をよく知らねェんだ。

何なんだこの状況はそこらじゅうに血が飛び散り頭や腹がねェ死体が転がってる。

本当にタクミがこんなことをしたのか？押し黙っているおれと、ナミとの言い合いが終わったゾロにタクミが状況を説明する。近くで気絶している６人はナミとウソップが坂から舟にかけて倒れているのは全部タクミがやったらしい。信じられないおれは「殺す」って言葉は使うけど本当に相手を殺そうと思ってとどめを刺したことは無ェ。

戸惑っているとゾロがタクミに質問をした。何があったのかと、タクミは加減をしていないからだと答えた

おれと違ってタクミは本気で闘うだけで相手を殺してしまうことがあるんだ。そんな力を持ったらおれは闘えるのかわかんねェ。

タクミは相手を殺さないと思っていたとゾロが言った。ゾロは冷静みてぇだ。賞金稼ぎをやっていたから見慣れているのかもしれない

でもタクミは?・・・・おれはタクミの事をよく知らねェ。

「???可笑しなこというんだな??・・・・・・

タクミは答えてくれた「殺される覚悟」海賊はみんなそれを持ってるって言った。おれも死ぬ覚悟はある。夢のために戦って死ぬなら別にいいと思っている。戦って死ぬそれは殺されるって事だ。海賊はみんな命をかけたそれぞれの殺される覚悟がある。そんな相手に手を抜くのは失礼だと言った。「殺す覚悟」も持たないといけないと、だからタクミは迷わない、だからタクミは強いんだ。

おれはタクミのことがちょっとだけ解った。そして最後の一言で1番大事なことがわかった。

・・・・・・そして仲間のためにな」

そうだ、はじめてあった時からタクミは守る為に戦っていたじゃないか。そんなタクミがおれを信じて仲間になってくれたんだ。

今日だってタクミは仲間を守る為に戦ってくれたんだ!!!!

「・・・・・そうか」

ようやくタクミの１番大事な気持ちがわかってタクミに目を向ける。
その時のタクミのはおれにとても優しい目を向けた、とてもじゃないけどこんな戦場で見せる顔じゃなかった。
・・・そうだ！！みんなに飯を作ってくれたあと最後まで喰ってるおれにあんな顔して聞いてくるんだ「うまいか？」って！！！
俺はタクミのことがいろいろ解った気がする。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

殺す覚悟（後書き）

温度差が酷い。

コタツ布団をたなびかせ（前書き）

１０万ＰＶ達成です！！ありがとうございます！！

コタツ布団をたなびかせ

~Ｓｉｄｅ　ゾロ~

おれは迷ってる。おれらしくねェな．．．

タクミの言葉が焼きついてる。「殺される覚悟」、「殺す覚悟」．．．

言いたいことはわかったんだ。己が信念の為、仲間の為、信念ある敵の為、命を軽んじることなく全力で生きろとタクミは言ったんだ。

おれも共感できる、そのように生きてきたつもりだった。けど．．．。

おれは賞金稼ぎを名乗ったつもりは1度もねェが「海賊狩りのゾロ」と呼ばれてる。生きる為に賞金首を狩ってきた。おれは大剣豪になる、くいなとの約束だ。その為に生きてきたんだ。

だけどおれは碌に航海もできないまま海を流離う賞金稼ぎでしかなかった。始めのうちは賞金首を殺しちしまうこともあったが政府は公開処刑を望んでやがる、殺してしまえば賞金額が半分になっちまうてんで、手加減して殺さないようになった。おれに狙われ逃げ出そうとしたような覚悟のねェヤツらはどうでもいいが、全力を持っ

て向かってくる相手にもおれは手加減をした。

賞金稼ぎとしてなら合格だろう。捕らえること、それが目的なのだから、おれが目指す高みは大剣豪だ！！戦いに全力を出さないようなやつがそこへ行けるのか？

これからおれは全力で戦おう。殺すことが目的では無い、ただ全力で戦う。大剣豪の名を手に入れるそのときまで。

~Side out~

ルフィとゾロは坂の中腹に並びクロネコ海賊団の連中と対じする。何か俺の演説を深く受け止めてくれたみたいで両者ともに覚悟を宿した眼つきにみえた。

まあ敵さんの何人かは逆にびびったみたいで船に引き返していった。それでいいんだウソップがこの戦闘をなかったことにすると言った以上クロネコ海賊団の船がここに残るわけにはいかない元気な船員も何人か残ったほうがいいだろう。

「ここから先はおれ達に任せてくれねェか？」

「別にいいけど危なくなったら助けに入るからな」

「相手が剣士じゃなかったらにしてくれ、これはおれの野望だ！！」

「ふっ・・・聞きそうにもないな。がんばれよ船の中にそこそこのヤツが2人いるみたいだから気をつけろよ？」

「それも占いか！？」

「これはハンターの勘だよ、ルフィ」

「にししっ！！そっか！！！」

何かルフィ楽しそうだな。いいことでもあったのか？途端にクロネコ海賊団の船員がざわつく船を見るとどうやらニャーバン・兄弟（ブラザーズ）が現れたようだ。船員たちの歓声をうけて船から飛び降りる。

スタタッ！！

「おいっ！！！なんだこりゃ！！？」

「ジャンゴ船長もやられちまったってのはマジみてぇだな」

どうやら先ほどの船に向かった船員は2人を呼びに行っていたようだ。身のこなしから俺が話したそこそこのヤツだと判断したのだろう二人が身構える。

「・・・ルフィ」

「あぁ・・・・お前らァ！！！お前らの相手はおれ達だ！！！覚悟があるなら前に出ろォ！！！」

「猫かぶってる場合じゃなさそうだなシャム！！！」

「あぁ全力で行くぞブチ！！」

「おおともよ」

背中を丸めてわざと隙を作っているシャム、コタツ布団をたなびかせて並走するブチ、2人がこちらに駆けてくる、爪を武器にする相手ということでゾロが一歩前に出た。その時、不意に2人の足が止まり、何かに脅え震えだした。先程まで覚悟を決めた目をしていたほかの船員たちも皆が震えている。

船員の1人が何事かをつぶやきがくりと膝をつく。その視線の先には手首の内側で丸眼鏡を上げるクラハドールこと海賊”百計のクロ”・・・・

「もう　とっくに夜は明けきってるってのに・・・なかなか計画が進まねェと思ったら・・・・・何だ　このザマはァ！！！！」

お嬢様を待つ必要は無いだろう彼女にはメリーの言葉で十分に真実は伝わっている。クロの口から辛い言葉を聞かされる必要もないだろう。

舞台は整った。役者は海賊、観客はいない。それでも舞台の幕は開く。

コタツ布団をたなびかせ（後書き）

浅いですね。

本戦開幕（前書き）

生命帰還で爪って伸ばせますかね？

元ネタはキルアなんですけど

本戦開幕

~Ｓｉｄｅ　クロ~

おれはこの眼を疑った何だこの状況は！！？船員の半数以上は倒れ伏し、ジャンゴのヤツまでいなくなってやがる。おれの計画が狂う？馬鹿な！！！３年、３年だぞ！？おれの最後の計画だ！！！

こんな餓鬼どもにじゃまされたっていうのか！？・・・何だあの銀髪は、髪は鬣のようにみえるしあの顔はとても人間には見えん。・・・そうか悪魔の実！！なるほど、こいつらじゃ手に負えないわけだ。くそっ！！失敗の可能性なんて考えてもいなかったからメリーのやつを殺してしまった。・・・もう後戻りはできない。いや？屋敷の使用人や村の住人の命を盾にすればあの夢見るお嬢様は自ら遺書を書き死んでくれるかもしれない。

当初の計画とはだいぶ異なるが仕方ないだろう。結果は変わらない。そうと決まればこいつらに用はない、いや？脅しをかけて餓鬼どもの始末をさせてみるか。成功しようが失敗しようがおれのマイナスにはならない。どうせ皆殺しにするのだから。・・・・・

~Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ~

「貴様、悪魔の実の能力者か？」

さすがクロ。一発で見抜いたか！！

「教えてやる義理はないがいいだろう。おれはライオンの力を手に入れた能力者だ！」

クロネコ海賊団の船員がどよめく中クロは”猫の手”をはめ、無音の超高速でシャムとブチの後ろに回りこみにその刃を突きつける。

「・・・・おいお前ら、・・・・5分やろう、その餓鬼どもを消せ！！それが出来ないのならお前ら皆殺しだ・・・その銀髪はおれがやる」

あれが”抜き足”かスピードは俺の「紙絵武身」での「剃」と大差ないな。誰に師事したわけでもないだろうにあの速度に加えて無音の移動術。化け物だな。クリークなんかよりよっぽど強そうだ。”疾さは強さ”とは誰の言葉だったろうか？

シャムとブチは抜き足を前にして逆らうことは無謀と察したのか素直に命令に従う

「よっよし！！5分あれば何とかなる！！あいつらたいして強そうじゃねェ！！5秒で片つけるぞ、ブチ！！」

「よしきたシャム！！」

2人はルフィとゾロに対じする、さあ俺もクロで「剃」の実験でもしますか・・・・想像以上に速いから「紙絵」の実験はまた今度にしよう・・・びびってる訳ではない・・・・・

俺はナミとウソップにお嬢様とお野菜三人組がくるかもしれないことを伝え、この光景を見なくて済むように坂の上で待機しておくようにと伝える。クロと打ち合う為に「生命帰還」で爪を伸ばして強化すると皆を巻き込まないように海岸へと駆け出した

~Side　ゾロ~

「「ネコ柳大行進！！！」」

暫くの睨み合いの後、2人がかりでの猛攻！ルフィは爪を防ぐ術が無いからか高く跳び上がる。初撃は武器の性質を見極める為、見(けん)に入ったがどうやら愚作だったみてェだな。一撃でしとめてェが連撃を捌きながらの攻撃は得策ではないじゃねェ。

一度距離をとろうかと考えていると、空中から伸びてきた腕が細身の男を拘束した

「お前の相手はおれだァ！！！」

伸びた腕を縮め、地面に降り立ち、今度は森の方に大きく首を伸ばすルフィ

「ゴムゴムの・・・・・・

コタツの男はそれに一瞬気を取られる

好期と見ておれは大きく1歩後退し距離をとる。

コタツ（もうこの際そう呼ぼう）は距離を取ったおれの方ではなく、意図を察知したのか伸びきったルフィの首を狙いにいきやがった。

逃がさねェ！！！

「虎・・・

おれは十分に刀気を練り上げ得意の大技を構える。ルフィの首にコタツの爪が届こうかというその瞬間大きく踏み込み三刀を振るう

・・・狩り！！！」ーーーガシュッ！！！！

背面におれの渾身の斬撃を受け、コタツが宙を舞う。そのときちょうどルフィの頭がゴムの弾性で凄まじい勢いで戻ってくる

・・・・・・鐘っ！！！！！」ーーーーガゴォン！！！！！

ルフィの拘束から開放された細身の男は、だらりと力が抜け宙を舞っていたコタツと共に地面に倒れる驚いたことに2人とも息があるようだ

コタツに入ったネコを狩るには”虎狩”は過ぎた技だと思ったんだが頑丈なヤツみてェだな。

さて、タクミはどうなったんだ??

海岸の方を見ると傷つき倒れるクロネコ海賊団の船員と長い爪を生やしたタクミがいた

クロのヤツはどこに行きやがったんだ?

みると船員たちの傷はつぎつぎに増えていってるようだ

眼を凝らして視てみると時折うっすらと影が見える気がする。

隣ではルフィが肩を震わせてその光景を見つめていた

「お前は仲間を何だと思ってるんだァ！！！！！」

普段耳にすることのないタクミの叫び声を聞いておれはその場の光景を理解した

~Ｓｉｄｅ　ナミ~

もと船長のクロの登場に1番脅えているのは船員たちのようだった。クロはいつの間にか2人の部下の後ろに立っていて片手に5本の刃のついた手袋を突きつけてこう告げる

「・・・・おいお前ら、・・・・5分やろう、その餓鬼どもを消せ！！それが出来ないのならお前ら皆殺しだ・・・・その銀髪はおれがやる」

その様子を興味深そうに見つめていたタクミはわたし達に話しかける

「ナミ、ウソップ、・・・・あの武器からはまだ新しい血の臭いが漂ってる。そのクロがここに来たってことは屋敷ではもう事が起こっ

てるかもしれない。お嬢様はきっとヤツを止める為にここに来る、たぶんウソップん所のお野菜三人組もな。あいつらにこの光景をみせるのは酷だ。もしやってきたら坂の上で食い止めてくれないか？何にも心配するなっていってやれ」

タクミはわたし達に笑いかける。タクミが眼を閉じて集中すると獣特有の鋭い爪の４本がメキメキと音を立て３０ｃｍ程伸びていく。クロと目を合わせた後、わたし達を巻き込まないため海岸のほうへと走っていった。わたしはタクミのお願いをウソップにまかせクロネコ海賊団の船へ向かう

こんだけ面倒な思いしてただ働きじゃ割に合わないわよ。

睨み合うルフィ達の横を通り抜けた先ではタクミとクロが爪と刃を交えて笑いあっていた

・・・・・・

クロネコ海賊団の船には質の悪い宝と少しばかりの現金があっただけで簡単にまとめられた

麻袋を抱えて甲板に上がると傷つき呻いているクロネコ海賊団の船員達の中心でタクミが叫び声を上げていた

「お前は仲間を何だと思ってるんだァ！！！！！」

タクミ・・・・！！？

~ Side Out ~

本戦開幕（後書き）

戦闘描写が難しすぎる。

もっと心理描写が書きたい。それもシリアスじゃないヤツとばすわけにも行かないし・・・

感想・評価お待ちしています。

終幕～finale～（前書き）

作者は重度のラルヲタです。

終幕～ｆｉｎａｌｅ～

クロを警戒しながら俺は海岸へと駆けていく。俺の意図はわかっているだろうがクロは俺についてきて、かつての船員に囲まれるかたちで俺と向き合う

「珍妙ななりだな。悪魔の実なんぞ喰いたくないとおもわされる」

そういえば東の海で動物系（ゾオン）の能力者は見なかったな。

「そうだなこの実が持つ凶暴性にあてられて今にもお前を喰い殺してしまいそうだ」

「やれるものならやってみろ！！！」ーーーーキィンッ！！！

すばやい初撃にくらいつき、「爪（そう）鉄塊」で受け止める。

俺は戦闘時「鉄塊」を身体の約５％以上にかけると動けなくなる。本来は５０％程までいけるのだが、「生命帰還」による半自動制御の「獅子　鉄塊」に精神力を裂くとこれが限界。「爪　鉄塊」は爪を強化する性質上指にまで「鉄塊」をかけてなくてはならない。

刃物を使う相手との戦闘を考慮して修行したのだが普通に武器をもったほうが精神力的に楽だったかもしれない。でも動物系が武器を使うのが邪道な気がしてやめた。

「獅子　鉄塊」の反応速度も自動制御のままではクロの速度に到底及ばないようだ。俺の無意識下での防衛本能によって動いて守る万能の鎧になる予定だったんだがまだ俺の意思で動かす際の初動を速めている程度の成果しかあがっていない。修行が必要だな！

俺はまだまだ上を目指せる。そう考えてクロをみるとクロは笑っていた。こいつ一般人になるなんてどっち道無理だったんじゃないかと思う。完全に戦闘狂の眼をしている。

腕力にまかせてクロの刃を振り払うとすぐさまクロが動く”抜き足”対俺の「剃」は完全に互角。平面の戦いでは埒が明かない、「剃刀」で立体の動きをしクロのを翻弄する。

俺の攻撃を背に受けてクロは不適に笑う。殺そうと思えば首を取れたが今回は捕縛が目的、殺すわけにはいかない

「もういい。お前の速さはわかった。だがお前はまだ本物の海賊の恐ろしさを知らない。みせてやろう速さのその先を！！！」

クロは脱力し腕をゆらゆらと動かす。クロネコ海賊団の船員は慌ててその場を離れようとするものや命乞いをするものなど様々だ

”杓死”かいまさらそんな技で何が出来るっていうんだ？お前の速さがわかったのはこっちも一緒だって言うのに。

「”杓死”！！！」

「は？」

・・・・いやまて、速い！！速すぎる！！！何だこれは想定外だ！

”杓死”って技は周りで被害を受けてる船員が叫んでいるように”抜き足”での無差別攻撃じゃなかったのか？

・・・・そうかそういうことか”抜き足”速さに目がついていってないこいつらは”杓死”速さが理解できてなかったんだ。

駄目だ目では終えても追いかけて捕らえることはできない。精々迎え撃つだけだが意識下制御で広範囲に広げている俺の「獅子　鉄塊」を警戒してか近づいてこない・・・・・・？

・・・・・・！！？俺は原作で語られなかった真実にたどり着いてしまった。クロは”杓死”を完全に制御しきっている。おそらく関係ない部分をわざと攻撃しそこに注意が向いたところをしとめようとしているのだろう。ためしに右腕に隙を作り「鉄塊」をかけているとそこを攻撃し、浅く打って離脱した。なるほど隙の少ない相手にはヒット&アウェイでダメージの蓄積を狙っているんだ。一撃でしとめられる隙を相手が見せるそのときまで

その為にこいつは仲間を無慈悲に切り続ける。

・・・ふっ！見つけた勝利への一本道！！決定的な隙を部分的に作る不自然さの無い行動！！！圧倒的有利を確信した相手を地獄へと誘う！！！！悪魔の咆哮！！！！！！

原作キャラの台詞を奪うつもりは無かったのだが、天を仰ぎ叫んだ。

「お前は仲間を何だと思ってるんだァ！！！！！！」

~Ｓｉｄｅ　クロ~

腕に鉄板でも仕込んでいるのか？

唯一見えた隙をついた攻撃は金属音が響いただけに終わり再び適当な場所を切りつけながらヤツの周りを旋回する。本当に隙が無い、ヤツの鬣の力の正体が解れば対処のしようもあるが、おまけに服の下には鉄板を仕込んでいるようだ。

だが僅か数秒後、おれの顔には三日月の笑みが張り付いた

勝機！！！

銀髪が天に向かって生温い戯言をはいた瞬間、おれはヤツの咽喉を目掛けて”猫の手”を薙いだ！！！

ーーーーギィィン！！！！

！！？・・・なぁっ？？？

ヤツは明らかに生身の咽喉でおれの”猫の手”を受け止めた！！ありえん悪魔の実の力か！？

ーーーードシュ！！！！

「っがはぁ！！！！」

両肩と両膝に鋭い痛みを感じ身体を見ると四本の極太の針がおれの身体を貫いていた。

おれの血に濡れて、怪しく輝くその針は間違いなくヤツの鬣だった。

~Side Out~

「獅子　針銃（しんがん）」

四肢の重要関節を貫かれ、地に横たわるクロに自分を倒した技の名前を教えてやった。技名は繰り出すときに告げるのがお約束なのはわかってるけど速度で上回るクロにそんな事やってたら逃げられるのでしかたない

俺に向けられる多くの視線を心地よく浴びながら告げる。

「終わったぞ、みんな！！！」

一味からは歓声、クロネコ海賊団からは畏怖のこもったやはり歓声

こうして舞台は終幕を迎えた

終幕～ｆｉｎａｌｅ～（後書き）

戦闘描写は本当に疲れました。

主人公は力の使い方に無駄が多いです。いつか原作組に抜かれると思いますが戦闘には参加させ続ける予定です。

感想評価お待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3875ba/

百獣の王

2012年1月12日19時51分発行